〈韓国と北欧の学校図書館見学記〉

IFLA ソウル大会に寄せて
―学生諸君のための周辺的お話―

渡　辺　信　一

図書館学の領域に国際比較図書館学という領域がある。このことについて、竹内悊氏（元・図書館情報大学副学長／ JLA 理事長）は、1982年発行の『論集・図書館学研究の歩み（第２集）』（日外アソシエーツ）に「比較図書館学について」と題する論文を載せておられる。冒頭に先生が比較図書館学の教えを受けた Richard Krzys 教授に言及されたのち、その歴史的概観をはじめ、定義、研究方法やその種類など、詳細にわたる説明がなされている。（p.60～78参照。）同氏が同論文中に紹介しておられる長倉美恵子氏（元東京学芸大学教授）も、1984年に発行の名著、『世界の学校図書館』（全国 SLA）のなかで、「国際および比較図書館学」という章を設け、竹内氏とは少し異なる視点で同様に有用な記述がなされている。（p.16～23参照。）長倉氏は、Dekker 社の『図書館情報学事典』（1971年発行）“comparative librarianship”の引用を行い、比較図書館学は対象によって、１国ないし１地域を取り扱う地域研究、特定の館種もしくは図書館の各技術領域を２国以上にわたってとりあげる比較研究、ある国や地域の特定の図書館、特定の図書館関連現象を追及していく事例研究の３種に分けられるとした。（余談であるが、『世界の学校図書館』が刊行されて間もなく、『図書館雑誌』の編集委員会より、同書の書評を書くようにという執筆依頼があった。私は躊躇なく、国際比較図書館学としての視点から同書を論じたことであった。）

実は私も上記の２氏とほぼ同じ頃、米国のライブラリースクールで国際比較図書館学を学んだ。1970年に入学したハワイ大学の GSLS（Graduate School of Library Studies）は、ALA の認可校となったのが1965年と他の伝統校と比較して歴史が浅く、それだけに教授たちは先進校に追いつき追い越

せとばかり学生たちへの指導は懇切丁寧ながら、きわめて厳しいものがあった。国際比較図書館学を担当されたのは、国際的にもご活躍で著名な Sarah K. Vann 教授で assignment は、上記３つ目の、ある国を特定しての事例研究に相当するものであった。言うまでもなくハワイは人種の坩堝であり、学生たちも多様な人種が混じりあっていた。加えて当時、米国連邦政府の奨学金制度（East-West Center スカラーシップ）による学生たち（主として大学院修士課程）が毎年数百名程度在籍していた。半数は米国人学生であったが、他はわれわれ日本人（毎年10～20名程度）のほか、主として東アジアからの留学生たちであった。彼（女）らは、国内でのきわめて高い倍率を突破してきただけに自分の国を将来背負って立つ気概のある若人たちの集団であった。（帰国後、自国の国立図書館長になったり、閣僚として活躍した同期生たちもいた。）大学構内での寮生活（“ハレマノア”と称する８階建ての大きな寮であった。）そして international day や inter-island tour などを通して大学院での授業とは別に、文化交流や国際親善に勤しんだことである。

話が横道にそれたが、Vann 教授の授業は先生が国際的なつながりないしは理解をお持ちであることもあって、外国からの留学生が多く受講していた。発表（oral report と称した。）はまず、各自出身国を特定して綿密に調査を行うことから始まった。それは竹内氏の論文でのＶ．研究開始の前段階（p.66～73）に該当する。私の場合、ハワイ大学図書館でかなりの日本関係の資料や情報が得られたが、最新の情報ということでホノルルの日本領事館や日本国内では当時の文部省資料など、図書館（学）以外に教育や歴史関係も含めて収集し、発表当日の配布／回覧資料はかなりのものとなったように記憶している。何しろ１コマが２時間半もあり、発表の持ち時間はとくに制限されていなかったところからクラスメートたちは皆競い合って、発表した。

そのような次第で、お隣の韓国や台湾（当時はまだ中国本土からの留学生はいなかった。）シンガポール、香港、フイリピン、そしてインドなどのクラスメートたちから親しく多くのことを学ぶことができた。このたびの中村先生からの原稿執筆依頼は、韓国の図書館情報学をいうことでもあったが、これは何と言っても金容媛氏（駿河台大学文化情報学部教授）がこれまで、（韓国の）図書館情報学教育の現状と発展、世界の図書館員教育－韓国、韓国の

情報政策と情報サービスについての論文があり、少し以前の論文であれば韓国の図書館法の改正－その経緯と内容、そして日韓における図書館の比較研究など、実に多くの研究発表をしておられ、とても私の出る幕ではない。しかしながら本稿のテーマの関係で、最小限のご紹介をするならば、同志社と深いかかわりのある悲劇の詩人、尹東柱（ユン・ドンジュ）の母校・延世大学校に図書館学科が1957年に設立されたあと、全国各地に図書館学科設立の機運が顕著となるが、その後、学科名称についての議論がなされ、1980年代になると文献情報学科という名称に統一されるようになった。現在の学科の柱は、図書館学、情報学、書誌学を主な柱としている。現在、４年制の大学が163校あるなかで、文献情報学科を設置している大学は32校あり、そのうち大学院は23校（うち博士課程を併設が11校で、他に教育大学院が13校、それから司書教育院が３校でリカレント教育が行われている。関連法規としては、図書館法（1963年）、図書館振興法（1991年）、図書館および読書振興法（1994年）などの法的効果もあって、情報専門家の養成やランク付けが確実に行われており、１級正司書（博士号取得者。２級正司書のうち、修士号取得者で勤続６年以上の者）、２級正司書（文献情報学科を卒業した学士号取得者、修士号取得者など）、準司書（短大で文献情報学科を卒業した者など）がある。

韓国の大学文献情報学科のもつ課題としては、ひとつには現在、大学教育制度として最小専攻単位認定制を実施しているところから複数専攻が可能であり、第２専攻として選択する学生が増加している。専攻必修科目が確保できない。さらには大学の教育研究者にはアメリカでの図書館情報学研究や教育を志向することにより、アメリカ図書館学に偏する嫌いがあり、韓国にふさわしい独自の図書館情報学、伝統的な図書館の実践がのぞまれるなどが指摘されている。

前置きが長くなったが、IFLA については、学生諸君はこれまで授業でじゅうぶん理解を深めていることと思う。私自身はモントリオール、シカゴ、東京、北京の各大会についで、このたびのソウル大会でようやく５度目の参加である。これまでの大会では、せいぜい東京大会で若干のお手伝いをしたのと、シカゴ大会の頃、教育と研究部会で日本側委員長の松村多美子氏（元図書館情報大学教授）や高山正也氏（元慶應義塾大学教授）とともに委員の末

席を汚した程度であろうか。東京大会では日本の多くの図書館人が実に献身的な努力をしておられた。ご多用のなか、企業を回って多額の浄財を集められた大先輩、栗原均氏（当時、JLA 事務局長のち理事長。53年商学部卒業）もそのおひとりである。

ソウル大会について、身近に感じたのは３年前の2004年10月に全国図書館大会が香川県高松市で開催された折り、祝辞を述べられた韓国図書館協会事務総長　李景求氏の一行が大会終了後、関西に寄られたのを機に大阪・梅田で歓迎夕食会をもち、ソウルでの IFLA 大会についてお話をうかがってからである。その後、前記の金容媛氏をはじめ、さまざまな関係者の方々が、JLA 機関誌『図書館雑誌』はじめ、IFLA 大会のご案内がなされてきた。そして昨年の８月にソウル大会が開催されたあと、各種の団体やその機関誌によって大会報告がなされている。（IFLA 日本側委員として活躍され、また今大会で貴重な発表をされた中村先生が、本誌で特集を意図しておられる。にもかかわらず、この程度の駄文で申し訳ない次第である。）

さて、大会はプログラムの上では、（2006年）８月20日（日曜）から24日（木曜）の５日間であった。ただし、それとは別に大会の前後にプレコンファレンスやポストコンファレンス、さらにいくつもの催しが行なわれた。

たとえば、竹内悊氏であるが、同氏は開会２日前の18日に IFLA Pre-conference: Scholarly Information on East Asia in the 21st Century において、“Early Book Paths as Preface to Library Cooperation”と題して基調講演をしておられる。先生のご発表は残念ながら私自身、当日の到着には間に合わなかったのであるが、先生からいただいた予稿集ならびにご丁重なお手紙（８／６付）によると、テーマは単なる図書館協力―とかく技術的な面からの見方に偏りがちな―とせず、先生の学位論文の発展的視点のようにも思われるが、中国から韓国へそして日本へと受け継がれてきた本の歴史と文化、そこに示される考えへの憧憬、反発、統合、あるいは習合、そこから本来の考え方の追及、といったリサイクルを繰り返して生まれてきたもの、そして中国と朝鮮半島から非常に大きな恩恵を受けて成立したもの、その恩恵に対して報いることがあまりにも少ないという思い、「異文化に対しての敬意に基づく相互理解」をという心情を述べておられる。

以下、期間中の詳細は前記、大会レポートや他の執筆者の原稿に任せるとして、ごく簡単に述べると、初日（８／20）は開会式が行われたが、華やかな民族音楽や伝統の舞いが演じられたあと、大会委員長などの祝賀のスピーチ、そして第15代韓国大統領　金大中氏の基調講演がなされた。教育と研究部会は、梨花女子大学を会場にして第３日目（８／22）に朝から全日を使って９名の発表がなされた。当分科会の報告は、田村俊作氏が大会レポート（p.834）に詳しく報告されているとおりであるが、午前中には「東アジアにおける図書館情報学教育機関の地域内協力」午後の部では「図書館情報学教育担当者のための教育ならびに生涯学習」といったテーマのもとに、前者ではシンガポール、韓国、台湾そして日本からは三輪眞木子氏（メディア教育開発センター）、後者ではインド、アメリカ、オーストラリア、の発表が行われた。

また、私の参加したもうひとつの部会、学校図書館分科会では、南アフリカ、インド、オランダ、アメリカ、香港、イラン、スエーデン、フイリピン、チリ、アルゼンチン、そして日本からは中村先生の発表がなされた。中村先生はひいき目に見るわけではないが、初めての参加・発表にしては堂々としたもので、フロアからの質問にもきちんと丁寧に回答しておられた。ただ分科会全体としては、中村先生が大会レポート（p.841）に述べておられるように学校図書館の果たす役割についての認識の相違からくる各国間の違和感はどうしようもなく、当部会今後の課題として何らかの共通理解が求められるように思われたことであった。

８月24日の Library visit は、訪問先が１か所に限定されており、いささか残念な思いであったが、訪れた信聖高等学校東泉図書館では、校長先生はじめ多くの教職員の諸氏から温かい心からの歓迎を受けた。また、ポスターセッションや COEX 展示場での JLA の展示やデモンストレーションがいつになく活発に行われ、JLA のブースはいつも賑わっていた。これらは IFLA 大会への参加の楽しみと喜びを倍増してくれるものである。卒業して図書館に勤めたばかりの諸君にとって費用のかかる IFLA 大会への参加は遠い別世界のように思う人もいるかも知れない。でもこの数日間に得る多くの資料と情報、それにほかならぬ世界の図書館人との交流の素晴らしさに着目してほしい。きっと気づいてくれる日がさほど遠くないことを心から願っている。

（わたなべ　しんいち。元同志社大学文学部教授。1970～71年米国連邦政府奨学金により、East-West Center およびハワイ大学ライブラリースクール（Graduate School of Library Studies）に学ぶ。IFLA 日本委員図書館学教育部会委員、日本図書館研究会国際交流委員長などを歴任。）

ハワイ大学卒業式：総長より卒業証書授与

ハワイ大学卒業式のあと、同志社ハワイ寮 OB で当時
ハワイ大学夏期大学長　Dr. Shunzo Sakamaki と

EWC 主催 inter-island tour の仲間たち

EWC の正門入り口（中央は EWC 本部、右はハレマノア寮）

IFLA ソウル大会開会式

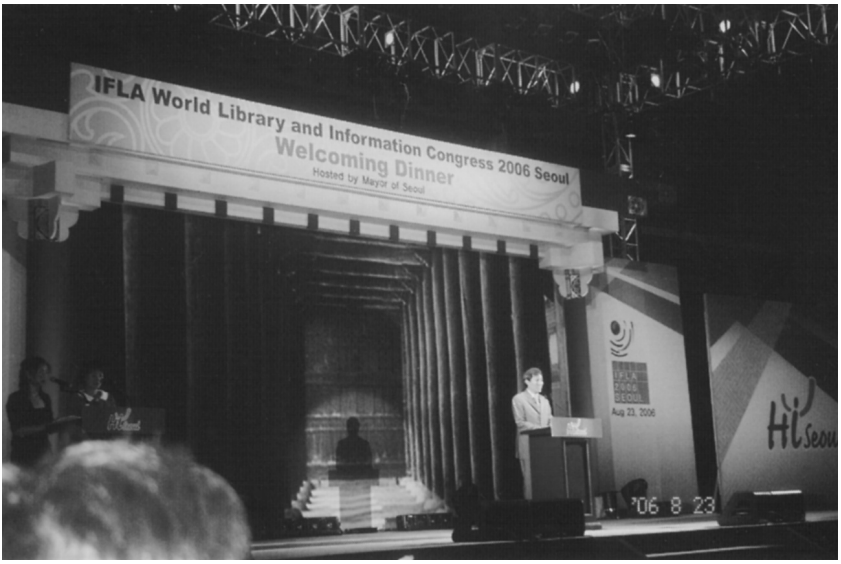
教育と研究部会（教育と研修分科会）

教育と研究部会（教育と研修分科会）

学校図書館分科会；中村先生の発表（壇上左）

信聖高等学校図書館の見学者と校長先生ら

信聖高等学校図書館の見学



ソウル市長招待歓迎夕食会（８月23日）

ソウル市長招待歓迎夕食会（同）

次期開催国・南アフリカ連邦の挨拶および紹介

JLA 展示ブース前にて

（左から JLA 国際交流事業委員長　宮部頼子、国立国会図書館関西館　佐藤尚子、筆者、JLA 理事長　塩見昇、前・国際交流事業委員長　阪田蓉子、宇治郷先生の各氏）